アフィニア日誌

皇　圭介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アフィニア日誌

【Ｎコード】
Ｎ３６４８Ｚ

【作者名】
皇　圭介

【あらすじ】
あこがれの先輩に３度目の告白にしてＯＫをもらえたその日、彼は異世界に召喚されてしまう。「我々を救ってください」と詰め寄る黒ローブたち。え、なにこれ。俺ってば勇者？　え？　違うの？　そんなことより元の世界に返して。「先輩との仲はこれからなんだよおおぉぉぉ！」　帰る当ての無い彼（？）の日常が始まる。

００話　「暗転」

学校帰り、一人土手を歩く。

その日は記念日になった。

夏休み前のその日、俺の顔はだらしなく笑み崩れていたと思う。

「～♪」

なにしろ1年間近く好意を抱き続けていた部活の先輩に、告白してやっとＯＫをもらったからだ。

恋敵（ライバル）は多く、その戦いは長く苦しいものだった。

告白は3回。

一度目は「あなたのこと知らないから」

自分の事を知ってもらうよう努力した。

2度目は「頼りない弟みたいにおもってるから」

頼りがいのある男になるよう、勉強も部活もがんばった。ついでに弁当で餌付けもした。

そして3度目「君には負けたよ。こんな気持ちにさせられるとは思わなかった」

「ふふふふふふ」

いや、気持ち悪いとかいわないで。だってしかたないじゃない！
幸せなんだもの！
今なら夕日に向かってだって走れる。
そう、どこまでだって！
先輩とのこれからの夏休みを想い。
ウエディングベルの鐘の音を聞き。
子供は何人がいいかなぁと完全に頭が湧いたところで。
目の前が真っ暗になった。
（え、え、え、何！？）
グラリと倒れる感覚。
顔面で感じた痛みとひんやりとした地面の感触が、その時感じた最後だった。

◇　◇　◇　◇　◇

「・・・・成功か？」
「・・・おそらく成功だろう」
まわりで聞こえる声。少なくとも一人二人ではない複数人の気配。

ぼんやりする頭を一生懸命働かせる。

（病院かな・・・？）

随分硬いベッドのようだが、そこに仰向けに寝かされている。
力を込めてみるが、腕どころか指すら動かせない。

（俺、いったいどうなって・・・？）

まったく自分の自由にならない体と格闘すること数分、なんとかまぶたを開ける事に成功する。
だが、そこにあったのは病院の白い天井ではなかった。

（え・・・なにこれ）

見えるのは岩肌。薄ぼんやりと照らされた岩肌が視界いっぱいに広がる。

（洞窟・・・？）

まったくわけがわからない。
何故、自分がここにいるのか。
なんでこんな所に寝かされているのか。

（夢・・？）

とにかく、情報がほしいとばかりに唯一自由になる目であたりを窺う。

うわ、なんかいっぱいいる。

寝かされた自分を囲うように、黒っぽいローブを着た人がいっぱい。
うわ、目が合っちゃたよ。
「おお・・、お目覚めになられた・・・！」
騒がしくなる周り。
何がなんだかわからない。この状況で体一つ動かせないなんて怖すぎる。
（夢、夢、夢、これは悪い夢）
まぶたを閉じれば夢が覚めて、先輩とのハッピーライフが始まるのだ。
現実逃避ぎみの俺。
だがそんな事など関係なしに状況は進む。
「お目覚めの気分はいかがですか？エメランディス様」
黒ローブたちの集団を割るように、濃い化粧の女が現れる。
３０代前半といったところだろうか。
いや、それよりも・・・。
（エメランディスって誰・・・！）
俺？俺が呼ばれてるの？何故何どうして？
「目覚めたばかりで混乱されるのも無理はありません」
「ですが、我々の話をどうか聞いていただきたいのです」

混乱する俺のことなどほったらかしでどんどん話を続ける女。
わけがわからないなりに理解した事は、

今、彼ら（黒ローブたちね）は悪逆非道な者たちによって滅ぼされそうになっている事。
起死回生として、太古の禁呪を使い俺をこの世界に呼び出した事。

「どうか、我々を救ってください」

待って、待って、待って。
これってもしかして。
小説とかでありふれたアレ？
魔王で勇者なファンタジーもの？

もしかして魔王とか倒さないと、もとの世界に戻れない？
ってか、ここ異世界？異世界なの！？
日本でないの？地球でないの？

先輩との甘々な恋愛生活が！！！！

（いぃぃーーーやぁぁぁーーーーー！！）

声が出ないので心で絶叫。
やっとのことで告白ＯＫもらって、その日の内に異世界召喚だなんて。
天国と地獄だなんて。

（ひどすぎる！！！！！）

だが、状況はこれで終わりではなかった。

突然、ザワザワとさわがしくなる周囲。
そしてガチャガチャという音と、一際大きな声。
「全員つかまえろ！一人も逃がすな！さからえば殺してもかまわん！！！」
え、何？悪い奴等、もう来ちゃったの？
魔王とか、倒されるまで城で待ってるもんじゃないの？
俺、体動かないよ？どうするの？というか、どうしたらいいの！？
その後はもう、大混乱としか言いようがなかった。
物が倒れる音とか、ガチャガチャいう音（どうやら金属鎧の音らしい）、ドシュッとかいうなんかやばげな音、助けを求める声、そして悲鳴。
（先輩、先輩、先輩・・・！）
目をつぶって現実逃避を続けていた俺は、いつの間にかあたりが静まり返っていたのに気づく。
そして、ゆっくりとこちらに向かって来るガチャガチャという音。
（ち、近づいてくる・・・！！！）
その音が止まった時、恐怖に俺は思わず目を開いてしまった。
そして目に映る、返り血に染まった金属鎧と真っ赤な剣（つるぎ）。
（ひいいいいいいいいいいい！！！）

気絶しなかったのを褒めてもらいたいぐらいだ。
今まで１６年生きてきて、これほどの恐怖を味わったのは初めてだ。

「ム・・・！どうやら怯えさせてしまったようだな」

騎士風の男はそう言って剣（つるぎ）をどこかにやると、にっこり笑ってきた。
正直に言うと怖かった。
何か、無理して笑い顔を作っている感じが。

「まったく、こんな年端もいかぬ娘を生贄にしようなどと」

娘？生贄？
何いってんの？？？？？？？

騎士に抱き上げられた俺に見えたもの。それは、俺の体だった。

自由に動かないその体は・・・ちっちゃな女の子のものだった。

01話　「記憶喪失」

「本当に間に合ってよかった」

騎士はそういって俺を抱きしめる。

男に抱きしめられる趣味などないが、体が動かないのだから仕方がない。

というか、鎧についた返り血とか付くからやめて。

血が、血が、血が！

（・・・・）

いや、現実逃避はもうやめるべきだろう。

現実を見つめなければ前には進めない。

だとしても、だ。

（なんで女の子になってんの！！？？）

体が動かせないから見える範囲で確認するかぎり、4、5歳ぐらい。

幼稚園レベルの幼女だ。

ストレートの長く青っぽい髪も見える。

勇者で魔王がファンタジーのはずなのに。

幼女に生贄ってなに。

もういやだ。先輩の所に返して！！

「隊長」

若い騎士がやって来た。

「どうした」

「制圧はほぼ完了しました。ですが、われわれの把握していない隠し通路があったようで」

「逃がしたか」

「4、5人ほどです」

話しこむ騎士たち。

というか、こいつ隊長だったのか。

「首謀者は逃がしましたが、コイツは回収できました」

若い騎士は手の中にある本を振ってみせる。

黒い立派な装丁の分厚い本で、とっても高そう。

「邪神召喚の書か」

「ええ。なんとか使われるのは阻止できましたね」

「まったく邪教徒どもは度し難い。それで、この娘の両親は」

「残念ながら」

え、ちょっと待って。

この娘が生贄で。

ここに俺がいるってことは・・・俺が邪神？

いやいやいや。俺はただの高校生ですから！善良な一市民ですから！！

何かの間違いですから！！！

「まったくこんな物があるから、いらぬ騒ぎが起こる」
「ええまあ」
「燃やせ」
「いやでも魔術師ギルドに確認を取ってからでないと」
「かまわぬ燃やせ」

待って、もしかしてそれって大事な物じゃないの？

主に、俺があっちの世界に帰るために！！

「わかりましたよ」

若い騎士はため息一つついた。
近くにあった篝火の中に投げ込まれる真っ黒な本。
パチパチと音をたてて燃え尽きていく。

（あああああああああああ・・・）

俺の意識はそこで途切れた。

◇　◇　◇　◇　◇

（ここどこだよ）

次に目覚めた時に見えたものは、天蓋つきベッドだった。
わずかにだが、首を動かすことができた。

（おお・・・、少しだけだが体が動く）

あとは指先ぐらいか。しかしなんだ、このベッドは。
やわらかすぎて体が沈みこみそう。でも柔らかいのに適度な芯がマットに入っているようだ。
ただ高価（たか）そうだなー、という感想しかでてこない。
庶民ですので。

（夢じゃなかったか）

どうしたらいいのか。
そもそも、もとの世界に帰れるのか。
でも俺、今、女の子なんだけど。帰っても女の子？

というより元の俺の体、今どうなってんの？

何もかもわからない。
情報、情報がほしい。

せめて体だけでも動いてくれたら・・・！

（先輩、待っててください・・・）

もう一度、周りを見渡そうとしたとき、その音は聞こえた。

コン、コンと2回。

（ノック？）

「失礼するわね」

視界の片隅に映っていた扉が開き、２０代後半と思わしき女性が入ってくる。

髪は薄いブラウン。全体的にほっそりしていて、何が楽しいのかその顔には笑顔が浮かべられている。

彼女はニコニコしながらベッドに近づいてきて・・・俺の視線とぶつかった。

「起きたのね。体は大丈夫？」

それに答えようとして、俺は気づいた。まだ、声がでないことに。

「あ・・・・、・・・あ・・・・」

彼女はにっこり笑うと「いいのよ」と言った。

「まだ無理をすることはないの。ゆっくり、ゆっくりとね」

頭をゆっくりと撫でられて、眠気が襲ってくる。

どうやら体はまだ睡眠を欲しているらしい。

その手に安心を覚え、俺は再び意識を手放した。

・・・・結局、言葉を話せるようになったのは2日後だった。

◇　◇　◇　◇　◇

この2日間、世話になりながら聞いたところによると、この女性の名は『クリシュティナ・オクスタン』といい、この屋敷の奥方らしい。

そして、この屋敷の主人は救出隊の騎士の一人だそうだ。

（たぶん、あの人だろうな）

一人の騎士の顔が浮かぶ。

血まみれの姿しか見ていないせいか、このいつも笑顔の女性の旦那さんというのが、こうなんというかイメージが湧かない。

しかしながらこのクリシュティナさんは非常に面倒見がいい。この屋敷にはメイド（そうメイドだ）も何人かいるようなのだが、俺の世話は必ず彼女がしてくれる。

早くに母親を無くした俺にとってみれば非常にくすぐったかった。

「喉は乾いてない？お水飲む？」

「退屈じゃない？絵本でも読んであげる」

「こんな服はどうかしら。やっぱり女の子なんだから、かわいい服を着たほうがいいと思うの」

構いすぎな程だ。

その様子から思うことがあったが、あえて指摘はしなかった。

その日の夕方、その男が帰ってきた。

「いくつか報告と質問がある」

まだベッドから移動できない為、それは俺の寝ているところで行われた。
例の騎士（やっぱり予想通り隊長だった）とクリシュティナさんと俺。３人だけだ。
旦那さんの名は『ベルフェ・オクスタン』というそうだ。

「まずは君の両親のことだが」

母親は亡くなりましたが、父親は元気ですよー、と思ったが理解した。

この体の、この女の子の両親。

「残念だが、二人ともお亡くなりになられた」

あの黒ローブどもめ。怒りが湧く。

「その時の事、何か覚えているかね」

知らないし、答えられるわけがない。どうすればいいんだ。
とりあえず、首を横に振る。

「・・・確かにショックな事だからな。覚えていなくても仕方がない」

とりあえず誤魔化せたか・・・？

「では質問を変えよう。どこの国から来たのかわかるかね？」

何？地元民じゃないの？国って、この国の名前すら知らないよ！
また首を横に振る。

「ご両親共々、旅の途中で巻き込まれたようだな。運のない事だ」
「あなた、その言い方は・・・」
「ム・・・。すまない悪かった」

こちらは小娘なのにきちんと頭を下げて謝ってくる。
好感度アップだ。

「一時的に記憶を失っているのかもしれんな。確かにこの年齢の子供にはショックが大き過ぎる」
「・・・・」
「では、せめて名前ぐらいは覚えてないか？」
「あ・・・、の・・」

名前って、本名言うわけにもいかないし。
もう首を横に振っとけ。

「そうか・・・。だが、名前さえわからんとなるとどうするべきか・・・」

いやほんと、どうしたらいいんでしょうね・・・。

「だったらあなた」

クリシュティナさんはポンと手を打ち合わせる。

「記憶、そう記憶が戻るまで家であずかったらいかがでしょう」

さも今思いついたように言う。
でも俺にはなんとなく、そう言い出すんではないかと思っていた。

「いやしかし。・・・だが・・・」
「ね、お願いあなた」
「・・・」
「ね、お願いあなた」

ベルフェさんはこちらに向くと、言いにくそうに訊ねてくる。

「あ・・と。名前がないと不便だな。まあとにかく、君の方はどうだろう、記憶が戻るまででもいいから、この家で暮らさないか」
「あの・・・、えっと・・・」

どうするべきか。もとの世界に帰る事は決定でも、とりあえずの寝床はほしい。
帰り方を探すにしても拠点は必要だ。

「・・・ご迷惑でなければ・・・」

がばっ、という効果音が出そうなぐらいの勢いで抱きついてくるクリシュティナさん。

「だったら、ね、ね」
「どうした」
「とりあえずでもなんでも名前は必要だと思うの」
「それはそうだが」
「わたしが付けてもいい？」

ベルフェさんは重いため息をつくと、こちらをちらりと窺う。

俺もコクリと軽く頷く。

「いいだろう」

「とっってもいい名前があるの」

それはね。

「アフィニア。アフィニア・オクスタンというの。素敵でしょう」

02話　「家族」

この家にお世話になるにあたって、ひとつ注意しなければならない事がある。
それは俺が、俺であることを気づかせてはいけないという事だ。

なぜならば、彼らは儀式が失敗したと思っている。

よく聞いてみれば、やはりあの黒ローブどもは邪神を信仰する狂信者たちで、邪神を召喚することによってこの国を、延いては世界を破滅させようとしていたという。
呼び出されるはずだった邪神の名は『終末の破壊神エメランディス』。
世界の終わりに現れ、太陽を飲み込み、月を飲み込み、最後に大地を飲み込むのだとか。

どれだけでかい口だよ、とあきれるが神話に文句をいっても仕方がない。
どちらにしても俺は破壊神ではない。
親戚にそんなおかしい人はいなかったし、地面とか食べる人もいなかったはずだ。

とにかく自分は破壊神とかではない。
では何か。
おそらく・・・、単なる想像に過ぎないが、あの黒ローブたちの儀式自体は成功していたのではないだろうか。
そして最後の最後に、まちがい電話をかけてしまったのではないか。
破壊神さんの自宅ではなく、この俺に。

そして俺はこの世界に呼ばれてしまった。
魂だけで。

この体の持ち主の魂は、あまり考えたくはないが、俺がこの体に入った衝撃で弾き飛ばすか押しつぶすかしたのだろう。別に俺のせいではないはずだが・・・罪悪感を感じる。

とにかく、もし俺が俺であることがばれてしまったら命は無いだろう。
事情を話した所で、納得などしてもらえそうにない。
だいたい何と言えばいいのだ。

「破壊神ではありませんが、別の世界の善良な一市民です。間違いで呼ばれただけで、ちっとも邪悪ではないですよー」

とでも言えばいいのか？
自分で言ってて無理だとわかる。

なので俺は、無害な一少女を装う。
背中がむずがゆくなるが、こればかりは仕方ないだろう。

「クリシュティナさん、おはようございます」
「おはよう。昨日は良く眠れた？」
「はい、ありがとうございます。おかげ様でぐっすり眠れました」

まだベッドから立ち上がれない俺に、甲斐甲斐しく世話をしてくれる。

「いいのよいいのよ、気にしないで。アフィニアちゃんはしばらく

この家で暮らすのだし遠慮なんかしちゃ駄目でしょ？」
「いえ・・・でも・・・」
「うん、まだ遠慮があるわね。あの・・・ね、お母さんって呼んでみない？クリシュティナさんって呼び方、なんとなーく余所余所しいでしょ？」

いや、余所余所しいもなにも他人だと思う。

「いくら覚えてないといってもご両親が亡くなられたばかりだし、不謹慎だと思うけれど」

でも出来れば呼んで欲しいな。
言葉には出さないが、何か圧力を感じる。

「お・・・お・・・、おか・・・、おか・・・」

小さいころに母親を亡くした身としては、母親経験値が不足ぎみなのだ。
レベルが高すぎる。

「おか・・、おか・・・か、母（かあ）さま」

何が違うのかはわからないが、この言い方なら俺の中の羞恥ゲージの上昇が低い。
『お母さん』は無理だ。

「んー、それでいいと思うの」

ＯＫが出た。

「そのかわり、父さまの事も、父さまと呼ぶのよ？」
「・・・」
「そのかわり、父さまの事も、父さまと呼ぶのよ？」

今、二回言ったよね。
なんというか、・・・か、母さまは押しが強い。
いつもニコニコして争い事とか避けて通りそうなのに。
騎士の嫁っていうのは、押しが強くなければなれないものなのだろうか。
それとも、なったから押しが強くなったのか。
卵が先か、にわとりが先か。

「・・・と、父さま」

はい、よくできました。

柔らかい手で頭をなでなで。
なんという幸せ空間・・・！駄目だ、抵抗しないと。

（俺には、元の世界に帰って先輩とイチャイチャするという野望が・・・！）

帰るために情報を集めるどころか、まだ満足に体も動かせないのですが。

（今はとにかく、動けるようになるのが先決か）

◇　◇　◇　◇　◇

「まさか、こんなにかかるとは」

あの後、結局時間をかけて押し切られてしまい、正式な養女になってしまった。

幼女の養女だ。

ごめん。物を投げないで。

彼女を・・・。クリシュティナさんを、母(かあ)さまと呼んでから1年。

自由に動けるようになるにはそれだけかかってしまった。

（もう先輩、俺の事なんて忘れてるだろうな）

告白ＯＫした日に相手が失踪だなんて、どう思われているだろうか。

いや、わずか、本当にわずかの可能性だが、元の世界とこちらの世界では時間の流れが違うという可能性がある。希望を捨ててはいけない。

それが例え、ほんの小さな可能性であろうとも。

まあいい。

しかし、ここまで回復に時間がかかるとは予想外だった。

病気とか、体力がないという話ではない。

医者の説明によると、体内の魔力が色々ぐちゃぐちゃになっていたそうだ

魔力・・・魔法。

ファイアーボール(火球)とかメテオストライク(隕石召喚)とかもあるんだろうか。

あんなのもあるのか。
あるんだろうな。魔力があるんだから。
話が逸れた。

とにかくそのせいで、体の意思伝達システムが麻痺していたらしい。
その上あまりにも複雑になっていたため、自然治癒しかないといわれたのだ。

これはあれか。
俺の魂のせいか。

何しろ、自分は破壊神なんぞではないとわかっているものの、少なくとも間違われるぐらいの存在。
１０分の１、いや１００分の１だとしても、この娘の体にとっては途轍もない負担だったのだろう。
だから、本来の魂を弾き飛ばした上、こんな体になってしまったのだろう。

あくまで予想だが。

動けないのならば、と言う事で、母(かあ)さまや父(とう)さまに色々教わることにした。
知っておいて損はないだろう。
俺には目的があるのだし。
ベッドの上で寝たきりでもやれる事はあるはずだ。

たとえばこの国。

国の名は『ジンバル王国』。
海に面した、それなりに大きな国という事だ。
国境を接する国は３つ。
テューレ、アーリス、ノアの３国。
ここ１０年ほどは戦争も無い。
平和な事だ。

平和万歳。

話が逸れるが。
ここ一年、ベッドに寝たきりで分からなかったのだが。

こちらの世界にはお湯につかる、という習慣は無いらしい。
普通は湯で体を拭くか、水風呂のようだ。
たしかに、お湯を沸かすというのは大変かもしれない。

気候的に、この世界は総じて凍死するほど寒くならないので、それで問題ないという事だ。
元の世界ではシャワーが中心だった俺でも、入れないとなるとお湯を張った湯船がほしくなる。
これはなんとかしないといけない。

寝たきりの間はどうしていたかって？
母（かあ）さまに、湯に浸した布で拭いてもらっていたさ。
羞恥プレイだが、動けないので抵抗はあきらめた。
家族のスキンシップだ。

トイレ？聞いてくれるな。

そういえば学ぶなかで知ったのだが。
なんとエルフやドワーフといった種族もいるらしい。
俺が勝手に言ってるだけで、エルフやドワーフといった名前ではないが。
耳長族とか、小人族とか言うらしい。
魔獣とか魔法生物とかいるらしいし、ファンタジーだ。

さあ行こう、夢と魔法と冒険の世界へ。

もう来てるけどね。
ただ、俺にかなりの魔力がある事を知った母(かあ)さまが、魔法の訓練をしてくれることになった。
その方が治りが早いらしい。

今使えるのは初級も初級、明かり(ライト)の呪文だ。
はじめて成功したときには感動したね。
魔法だよ、魔法。
母さまによると、俺は筋がとってもいいそうだ。

なんでも話によると、母さまは魔術の研究施設に勤めていたらしい。
実践よりは研究メインで、大魔術士とかではないそうだが。
そこで警備主任の騎士だった父さまと知り合ったとか。

のろけられた。

まあでも、その話を聞く内に予想が当たっていた事が判明した。
やはり、父(とう)さまと母(かあ)さまには子供がいないらしい。
それも、生まれてから亡くなったのではなくて、もとからいないのだ。

どちらかだろうとは思っていたのだが。

するとこのアフィニアという名前は、いつか子供が出来たときのためにずっと温めていた物なのだろうか。・・・母さまに秘密を持っているのはとても心苦しいが、打ち明けられるたぐいの物ではない。

元の世界に帰るのは決定事項だが、はたして俺はこの新しい両親と笑って別れられるのだろうか。

「母(かあ)さま、今日は新しい呪文を教えていただきたいのですが」
「明(ライト)かりはもう完璧だし、そうね、加速(クイック)Cなんかはどうかしら？」
「どんな呪文なのですか？」
「対象は自分だけだし、短時間だけど1．2倍のスピードで動けるようになるのよ。腕とか」
「それはすごいです」

その時にならないと分からない事だし。
・・・考える必要は無いのかもしれない。

今は、まだ。

０３話　「初めてのお出かけ」

「父(とう)さま母(かあ)さま。準備は出来ましたか」

１年以上ベッドに寝たきりの生活だったのだ。
このお出かけを多少楽しみに思っても仕方が無いだろう。

いや、すごく楽しみだ。
先ほどの問いかけを１０数回してしまうほどには。

そういえば、こちらの一年は元の世界より短い。
なんと３６０日なのだ。

誤差の範囲だろうとは思うが、やはり別の世界なのだと実感。

「・・・待たせたな」
「お待ちどおさま。そうしていると、やはりあなたも年相応ね」

年相応・・・！

今なにかヒビが入った気がした。
主に俺のプライドとか、とか。

「あなたは妙に大人びた所があるから。そういう所が見れて、わたしはうれしいわ」

誕生日などわかるはずもなかったので、母(かあ)さまを母(かあ)さまと呼んだあの日を誕生日とした。
年齢は５歳。

本当の所はわからないが、そう決まったのだ。

そして先日の誕生日で6歳となった。
屋敷をあげてのパーティーで、身分の上下も気にしないお祭り騒ぎだった。
日頃見かけるメイドさん（そうメイドだ）や御者さん、父さまの部下の人とか。
ずっと前に見た、あの若い騎士さんもいた。
どうやら、まだ下っ端のようだ。

まだ出世してなかったんだね。

ただ、この身分をあまり気にしないのがこの家だけなのか、世間一般かどうかはわからない。
要検証、である。

準備が出来たのならば、と馬車にて出発する。
目的は王都である。
そうはいっても長旅にはならない。
朝に出発すれば、馬車でゆっくりいっても昼前には着くのだ。

だが、俺の興奮が冷めることは無い。
話には聞いていても実物を見るのは初めてなのだ。

異世界の町並み！
人とは異なる亜人種たち！
まだ見ぬ食材！（これは微妙に違うか）

そんな俺を母さまも父さまも微笑みながら見ている。
ちょっと幼かったかもしれない。

いや、年齢的にはいいのか。

6歳といえば小学校一年ぐらいだしな。

王都に着くまでまだ距離はあったが、馬車の窓から異世界の風景を堪能した。

◇　◇　◇　◇　◇

「そこは人種の坩堝(るつぼ)でした」

数時間の馬車の旅も終わり。

待ちに待った王都だったが、やはり凄かった。

確かに人の多さという意味では現代日本のほうが上だろう。

だが、なんというか混沌さがこちらは勝っているように思う。

整理されてないからこその活気とでも言おうか。

（すげえ、エルフだ）

皮鎧に身を包み、数人の仲間と談笑する姿はもろにゲームの世界だ。

たぶんあれが母(かあ)さまに聞いた、冒険者なんだろう。

キラキラした目で見ていると、こちらに気づいたのか手を振ってきた。

こちらも手を振り返す。

おうおう、何ガンつけてんだこらぁ

というのはなかったか。
6歳の女の子相手に凄む奴はさすがにいないか。
あまり、キョロキョロし過ぎて迷子にでもなったら恥ずかしい。
ここは親孝行のためにも手を繋ぐべきであろう。

ベルフェ父さま。そのお顔は少々、だらしないですよ？

◇　◇　◇　◇　◇

その日、俺達親子は目一杯楽しんだように思う。
母さまには洋服屋を何件も連れ回された。
自分のは選ばずに全部俺のだったのだが。

「ふふ、アフィニアはなんでも似合うわね。選びがいがあるわ」

まさか、着せ替え人形の気分をリアルで味わうハメになるとは。
母さまの楽しそうな顔をみていると、嫌とも言い出せない。
体が女になっただけでは買い物は楽しめないらしい。

初めて食べる果物の味に驚き。
他国の民芸品を手に取り。
大道芸人たちのパフォーマンスを楽しみ。
大通りを人ごみの中、家族の会話を楽しんで。

そしてそれは起こったのだった。

それは衝撃。
横合いから突然飛び出してきた人影に体当たりされ、俺はゴロゴロと転がった。
当然ぶつかってきた方も俺に巻き込まれてだ。

少しぶつけて頭が痛いし、手や足に多少の擦り傷はできたかもしれないが。
とりあえずは無事だった。
そこで怒りが湧いてくる。
こんな人が一杯いるところで、走る速度ではなかった。

思わず素で文句を言おうとして固まった。

（ダークエルフ・・・！）

いや、エルフなんて名前ではなかったか。
確か耳長族。
するとこれは黒耳長族とでもいうのか。
でもそれだと耳だけ黒そうだ。

どうでもいい。
もうダークエルフでいいや。

そのダークエルフは銀髪に褐色の肌の・・・。

自分と同じぐらいの少女だった。

「えと、大丈夫？」

少し頭でも打ったのか、どうやら意識が朦朧としているようだ。
しかし、周りの人も冷たい。
あきらかに見ているのに無視している。
こちらの世界にも他人に対する無関心とかあるのか。

しかし、と思う。
随分薄汚れた格好の子供だ。

親はどこにいるのだろう。

「ほら、立てる？」

手を差し伸べる俺。

「・・・」

脅えた表情の、その少女の視線を目で追って。
ヒゲづらの汚らしい男とご対面することになった。

「いいか、小娘」
「・・・」
「このガキの首輪が見えないのか？他人の奴隷に手を出したら何されても文句はいえねえぜ」

首輪？首輪ってなんだ？
母(かあ)さまは奴隷なんて・・・。

この世界に奴隷制度なんてあったの？

「アフィニア、こっちに来なさい」

父さまの声。そっちを見ると青ざめた母さまの姿もある。

こちらにこようとしているのを、父さまが押しとどめている。

「おおっと、貴族の嬢ちゃんでしたか」

父さま母さまを見ると途端に卑屈になる男。

「家の奴隷が迷惑をおかけしまして」

「・・・」

「ほら、おまえも謝るんだ」

無理やり少女を這い蹲らせると、頭に足をのせ踏みにじる。

そして、ところかまわず蹴りはじめる。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい」

頭が真っ白になった。

その時、自分がなにを考えたのか後になっても分からない。

ただ、とっさにダークエルフの少女に覆いかぶさっていた。

そして感じる脇腹への強い痛み。

鍛えてもおらず、一年間もベッドの上で暮らしていた俺には庇う事さえ出来なかったようだ。

先程のように・・・今度は一人で転がっていく。

聞こえる母(かあ)さまの悲鳴。

「アフィニア、アフィニア・・大丈夫!?」

「ちっ」男の舌打ち。

「貴族さん、今のはオレが悪いわけじゃねえぜ?」

「わかっている」

「じゃあ。オレはこれで」

少女を連れて行こうとする男。

「・・・ま」待ってと言おうとした俺の声に被るように、父(とう)さまの声が聞こえた。

「待て」

「貴族さんといえども、規則(ルール)には従ってもらわねぇと。奴隷をどうしようと、持ち主の勝手、それが法さぁ」

「それもわかっている」

「文句は聞かねえぜ。規則(ルール)を守らせるのがあんたらの仕事だ」

「いくらだ」

父(とう)さま・・・!

「金貨6枚、いや諸経費あわせて7枚になるなぁ」

父(とう)さまを値踏みする男。

あきらかにこちらの足元をみている。

「いいだろう。持っていけ」

父(とう)さまの手から金貨を受け取る男。

「へへへ・・・、毎度ありー」

下卑た表情を浮かべて去っていく男。

結局、自分は何も出来ないまま終わってしまった。
何がしたかったのかもわからないまま。

場を収めたのは、父(とう)さまと金貨(かね)の力だった。

◇　◇　◇　◇　◇

帰りは行きより人数が増えた。
でも空気はとっても悪かった。

ダークエルフの少女も脅えていたが。
まあ無理も無い。

母(かあ)さまの機嫌がとっても悪かったのだ。

年甲斐もなく、ほっぺを膨らませているのはどうかと思うが、今回は悪いのは自分の方だから仕方ないだろう。やった事の善し悪しはともかく、心配かけたという一点において全面的にこちらの敗訴

が決定してしまう。

「母(かあ)さま、ごめんなさい」

ぺこりと頭を下げる。

そして必殺の上目づかい＋涙目。

これは滅多に使われない、ゲージを２つも使う超必殺技だ。

ゲージの名前は羞恥ゲージだ。

だが・・・。

クッ、これに耐えるというのか。

いつのまに抵抗(レジスト)値が上がったのだ。

だがほっぺがピクピクしている所を見ると、もう少しで壁は突破できると見た！

「もういいだろう。そのぐらいにしておいてやれ」

父(とう)さまのフォロー。

「おまえもちゃんと反省したな？」

「うん。もう無茶な事はしない」

「アフィニアもこう言っている。許してやれ」

「もう。わかりました。でももうこんな心配させないで」

母(かあ)さまがにっこり笑ってくれた。

やっぱりこの笑顔だよなー、と思いつつ眺める。

あれ？俺、いつのまにかマザコンになってないか？

思い当たる事はたくさんあるが、今は女の子だからいいよねと納得する。

でも。これからやろうとしている事を言ったら怒られるんだろうな。

たぶん。

０４話　「お勉強の毎日」

「君の名前を教えてほしいな」

両手で彼女の手を握り締め聞いてみる。

同姓相手には効かないかもしれないが、首をかしげながらのにっこり攻撃だ。

おや？褐色の肌がピンクになってる。

なかなかおれもつみつくりなおとこだ。

中身以外は女の子だがな。

しかし、この自分の体はかなり容姿レベルが高いようだ。顔も整っているし、髪も暗青色（ミッドナイトブルー）というのかとても神秘的だ。

色については詳しくないので、それっぽく言っているだけなのだが。

「・・・シャーリーオール」

「うん、いい名前だね。僕の名前はアフィニア」

よろしくね。

ダークエルフの少女は僕に釣られるように笑ってくれた。

ああそういえば。ダークエルフのこちらでの種族名は『闇族』。

黒耳長族でも、耳長黒族でもなかった。

耳長族の仲間には入れてもらえないらしい。

肌の色以外、いっしょなのにな。

◇　◇　◇　◇　◇

この世界で生きていく為には我慢しなければならない事がある。
そもそも、戻る方法さえ分からないのでは諦めるしかないが。
たとえば。
それは、読みかけの小説の続きであったり、ＴＶ番組だったりと色々だ。

娯楽が少ないのは仕方がない。
何しろ中世ヨーロッパのような世界だ。
携帯もなければゲームもない。
あるのは本ぐらいだ。
だが紙は高価なものではないが、活版印刷などないこの世界の書物とはすべて手書きだ。
手書きである以上、手間がかかる。
なんでも、本の内容を書き写し、複製するという職業もあるそうだ。
それはそれとして、初めて書物を見たときに気づいた。

文字を読めないことに。

会話が成立しているのだからここの言葉は日本語だと思っていたのだが、そうではなかったらしい。
どうやら、頭の中で翻訳がなされているようだ。
どうして、とか何故というのはこの際置いておこう。

少なくとも考えたところで、今、答えが出るものではないからだ。
母(かあ)さまと実験したところ、耳から入った言葉は、たとえそれが普段使われない古代魔術語であろうと理解できた。能力としては、知性体の発した言語が耳に入ったときに、それが理解できるというもの。
そして、母(かあ)さまによると俺はこの世界の言葉を喋っているらしい。
少なくともそう聞こえるという事だ。
よく分からないが、元の世界におけるテレパシーのような物ではないかと思う。
鳥とか、馬と話せるかも、と思って試したが無理だった。
あくまで人、それに近い知性のあるもの限定らしい。

そういったわけで日常生活には害がないものの、本が読めないというのは困る。
元の世界に帰るためには、調べなければならない物がたくさんあるのだ。
たとえばあの『邪神召喚の書』。
あれは失われてしまったが、もしかしたら複製(レプリカ)がどこかにあるかもしれない。
そもそも、あれがオリジナルだったとは限らないのだ。

みつけても　よめないものでは　しかたない。
字余り。

そんなわけでお勉強だ。
ベッドで寝込んでいるときから続けているが、あまり苦にならない。
特別、勉強が好きというわけではなかったはずだが、教えてくれるのが母さまだというのもあって、どんどん知識を吸収していった。

まずは文字。
文字一つ一つの意味を覚えた。
これは単純作業なのでこれからも努力しかない。

つぎに貨幣制度について。

ここは日本のように円（えん）ではなく、通貨単位は『シラ』。
一番価値の低い、骨でできた骨貨（コッカ）、続いて銅貨、銀貨、金貨、魔晶貨の計５つ。
話を聞いたところ、だいたい骨貨一枚＝１００円といったところで、これが最小単位の１シラ。
この骨貨が５０枚で銅貨となり、銅貨が２０枚で銀貨になる。
そして、銀貨１０枚で金貨。つまり、金貨１枚１万シラで、約１００万円の価値をもつ事になる。

つまり、シャーリーオールは金貨７枚だから７００万円ということになる。
奴隷制度の善悪とかそういうのを抜きにして。
あれぐらいの年齢の少女奴隷は相場としては本来は金貨４，５枚ぐらいらしい。

やっぱり足元を見られたようだ。

奴隷制度についてはひとまずは考えない。
こちらの世界に俺の常識を押し付けても仕方がない。

で、金貨の上に魔晶貨というのがあるが、これは通常では出回らないものらしい。
価値的には金貨３０枚で、魔晶貨１枚になる。

魔晶貨1枚で３０００万円か。すげえ。

（しかし、母さまも疑問に思わないのかな？）

あきらかに、こちらの世界の一般常識が抜けている俺を怪しんでもしょうがないと思うのだが。

色々おかしなところもあるし。

言葉とか。

ショックで記憶の混乱とかいうレベルじゃない。

だがまあ愛されている、という事なのだろう。

ありがとう母さま。

次に社会制度。

まあ、学生の俺はそこまで詳しくないし間違っているかもしれんが、この世界は中世封建制っぽい物で成り立っているらしい。

つまり王がいて、諸侯（つまり貴族ね）に領地とその保護を与え、かわりに忠誠を誓わせている。

貴族の下に騎士がいて、貴族も彼らの生活を保障し忠誠を誓わせているそうだ。

爵位の階級は７つ。

王・公・侯・伯・子・男・士で、王は王族のみ。

父さまは騎士爵ともよばれる士爵で、戦功著しい者に与えられる一代限りの物らしい。領地と呼べるものはなく屋敷を主君に貰い、給料によって生活する。領地と爵位を継げるのは長男のみなので、次男・三男は外に出て騎士となるしか道がないそうだ。後は他家への婿か養子か。

ベルフェ・オクスタン士爵、つまり父さまは貴族の配下ではなく、王族直属の騎士との事。

まあ、継ぐべき領地がないというのは良い情報だとおもう。
もしそうなっていたら、婿養子とか取らされていたかもしれん。
他にも色々ならったがそれは追々語りたいと思う。
いっぺんに沢山書いても仕方ないしな。

ところで途中からはシャーリーオールも一緒に勉強する事になった。
母さまの提案だが、どうやら父さまも母さまも彼女を奴隷としては扱う気はないらしい。
もともと屋敷にも奴隷はいなかったし、奴隷制度についてあまり好意的ではなかったようだ。。
どうしても、元の世界の常識が抜けない俺としては好ましい限りだ。
最初は戸惑っていた彼女も、今ではすっかりとこの屋敷に打ち解けている。

俺にはどうかって？
まあ、言う必要も無い事だな。
何しろ彼女は、俺専用のメイドさんだし。
しかも自分から志願してのメイドさんなのだ。

そう、ダークエルフのメイドなのだ。

屋敷の仕事を手伝いたい、と言う彼女をとりあえず俺のお世話係に任命したわけだ。
母さまが。
まだ7歳だしな。

そういえば、彼女は名前が長いのでシャーリーと呼ぶ事にした。

「アフィニア様、ここが分からないのですが」
「どこ？」
「ここなのですが」
「ああ、これはね・・・」

様付けはどうかと思うが、最初はご主人様だったのだ。
名前を呼んでほしいという、俺のお願いを受け入れてくれたのだ。
実際、彼女を救ったのは父さまで俺ではないのだから感謝されても面映い。

だが彼女と仲良くなるというのは歓迎だ。
なにしろかわいいしな。

ロリコンではないよ？
だって彼女は1歳年上なのだ。
今は。

・・・というより今は同性だった。

◇　◇　◇　◇　◇

そういえば、俺が学んでいる魔法についてもここに書いておく。

魔法。
それは、呪文と呪紋を用いて世界に自らの意志を反映させる技。

魔法を使うためには、正確な呪紋を描く事が必要なのだ。
まず、杖の先でもって空中に魔力で紋(しるし)を描く。
これは呪文ごとに決まっており、対応した呪紋でなければならない。
なぜなら、これは魔法の設計図であるからだ。

そして、この呪紋をカギとして『世界に言うことを聞かせる』。
そして呪文は呪紋を補強する。
呪文といっても、魔法そのままを口にするだけだが。
だが、言葉にする事によって、・・・たとえば、そう「炎の矢(フレイムアロー)」という言葉に込められた、それを使用するのだという意志。
それに呪紋の炎の矢(フレイムアロー)の設計図が合わさりやっと世界を変えることができるのだ。
『炎の矢が飛んでいるという現象』が現れた世界に。

そのため魔法は得てして効果が短い。
一部とはいえ、『世界に言うことを聞かせる』ことはそれほど難しい。
そして呪紋は融通が効かない。
この呪紋は、描く魔力さえあれば誰が使おうと、どれだけ魔力が多い大魔術士だろうと。
呪紋が同じならば、効果も威力も同じなのだ。
なぜなら、呪紋という設計図の中に効果も威力も描かれているのだ。
強力な呪紋ほど、描くのに膨大な魔力が要るのは確かだが。
シャーリーもこの魔法という物に興味を引かれ、ともに学んでいる。

授業態度もかなり真面目だ。
「アフィニア様は、私が守ります」
などと言ってくれる。
一度、ダークエルフなんだから精霊魔法とか使えないの？　と、聞いてみたが、母（かあ）さま共々不思議そうな顔をされた。
どうやら精霊はこの世界にはいないらしい。
ダークエルフというのも俺が言ってるだけだしな。

◇　◇　◇　◇　◇

「計画の第３段階～」
第１と第２がどれだったか忘れたが、とりあえず次の計画だ。
それは体を鍛える、である。
シャーリー事件の時に、まったく良い所が無く母さまに心配をかけるだけだった俺。
反省はした。だが。
このままでいいのか？
いや、いいはずがない！
外はともかく中身は男の子。
やってやろうではありませんか。
と、いうわけで。

「父さま、僕に剣術を教えてください」
「駄目だ」
「・・・」
「そ、そんな目で見ても、だ、駄目だ」

必殺技を使ったのに駄目とは。
最近、使用頻度が多かったか。
父さまも母さまも抵抗を覚えたようだ。
何らかの新技の開発が急務かもしれない。
現存の技の更なるパワーアップでもいい。

まあいい。
今は、手持ちの戦力で戦い抜こう。

「どうして駄目なんですか？」
「おまえは女だろう」
「はい。でも女騎士というのも前例が無いわけではないそうですよ？」
父さまは苦り切った顔をする。
「妻がいったのか？」
「はい。母さまも分かってくれました」
もう一押しか。
「父さま、僕は花嫁修業でもして、さっさと嫁に行けとおっしゃるのですか？」

「おまえは嫁にやらん！！」

ふふふ。

そう言うと思った。

こちらの世界の父親もやはり同じのようだ。

父さまはまだ悩んでいたようだが、やがてため息をついて頷いた。

「だが、怪我をするかもしれんぞ。何しろおまえはまだ６歳なのだから」

「はい、父さま。ですから父さまにお願いしているのです」

再びにっこり。

「父さまのことなら信用できますから」

「ぐ・・・」

ふふふふふ、これで断れるハズがない。

「わかった。だがわしは厳しいぞ」

「覚悟してます」

「おまえは本当に６歳なのか・・・？」

「もちろんそうです」

父さまと視線が絡む。

「まあいい。おまえは良い娘だ。ならばそれだけでいい」

ありがとう、父(とう)さま。

０５話　「魔獣」

「・・・ィニア様」

声が聞こえる。

「・・・アフィニア様、起きてください」

暗闇をかきわけ、光に向かって泳ぐ。
ぼんやりと開けた目にはダークエルフのメイドさんの姿が映る。

「もう、朝ですよ？早く起きないと怒られますよ？」
「ん～、あと５分・・・」
「５分ってなんですか・・・？」

おお、そういえば、一時（いっとき）という言葉はあるが、分とか秒とか無かったな。
こちらの世界には・・・。
日時計という物はあるが、あまり時間に縛られてはいない。
朝が来れば起きて、暗くなれば寝る。

「まったく寝ぼすけさんなんですから」
「・・・シャーリー、朝のこのわずかな時間は金貨１０枚を払ってでも得たい貴重な物なんだよ」
「何言ってるのか、わかりません」

むう・・、せっとくがむりならじつりょくこうしだ。

あふぃにあはだーくえるふのしょうじょにだきついた！

あふぃにあはすばやいうごきでふとんにひきずりこんだ。

「え、あ・・・ま、待ってください。そ、そこは・・・さわっちゃダメです！　まだ心の準備が・・・」

「・・・おやすみー。ぐぅ」

「・・・・・・・」

「・・・ア、アフィニア様？」

「・・・ええっと、どうしよう？」

◇　◇　◇　◇　◇

我が家には2頭立ての馬車がある。

当然、馬車があるのだから馬を飼っているだろう。

ウマ目・ウマ科の動物である。

ウマの様な生き物なのかもしれないが、そんな事は気にしないことにした。

ヒツジなどもいるようだし。

家には黒鹿毛（くろかげ）が1頭と栗毛が3頭いる。

何が言いたいのかというと、馬って大きい、である。

普通の人にとっては当たり前の風景も、異世界人である俺にとっては驚きの連続だ。

馬なんて元の世界でもテレビでしか見た事がない。

馬車に乗ってお出かけするときに見た事はあったが、こうして間

近で見るのはまた別の趣がある。

「馬の世話を見るのは、そんなに面白いですか？お嬢様」

馬小屋にて馬たちの世話をするのは、御者さんであるところのライズさん。

さきほど馬の散歩から戻ってきたばかりである。

今現在は馬の汗を流し、ブラシをかけているのとの事。

ライズさんは現在２８歳という事だが、彼は屋敷に勤めるメイドさんの１人、フィオレさんの旦那さんだ。

なんでも２人は若いころに駆け落ちしてきたところを、父さまに拾ってもらったのだとか。

紳士然としたライズさんにも情熱的な時代があったのだな、と感心したものだ。

馬の世話を何とはなしに眺めていると、屋敷の方から誰かが歩いてくるのがみえた。

「すまぬ、ライズ。馬を用意してもらえぬか」

やって来た父さまは、複合鎧（プレートメイル）に身を包んだ完全武装だった。

俺の姿を見つけると、物凄く嫌そうな顔をする。

「父（とう）さま、お出かけですか？」

「連れてはいかんぞ」

「・・・父（とう）さま」

うろたえる父さま。

父さまは、こんなに顔に出やすくていいのかと思う。

それとも娘限定なのか。

「と、とにかく今回は危険なのだ。連れて行くことは出来ん」
「えー」
「とにかく駄目なものは駄目だ」

むむ・・・手強い。

「隊長、準備は終わりましたか？」
「まだだ。もう少し待ってくれ」

新たな登場人物。
あれは・・・父さまの部下の新米騎士さんではないですか。

「いや、もう新米ではないからね」

若い騎士さんが苦笑する。
うお、口に出してた。
とりあえず、にっこり笑って誤魔化す。

「おはようございます、カレルさま」
「いや、俺の名前カインだから。君、ワザとやってるだろそれ？」
「いえ、そんな事はないですよカインさま。ところで、どちらに行かれるのですか？」
「アルミナ湖だよ。魔物が出たとの報告があったのでね」
「おい、カイン！」

もう遅いですよ、父さま。

「父さま。見てみたいです」
「駄目だ。遊びではないのだ」

「将来のためにも、本当の戦いという物を見ておきたいのです」
「まだ早すぎるだろう。もっと経験を積んでからでも遅くはない」
む、単独での突破は無理なようだ。
ならば。

「カインさまは良いと言って下さいますね？」
「え・・・？いや、オレは・・・」
「魔物が出るとの報告を受けただけ。なら、絶対に会うかどうかも分かりません」
「そ、そうかな？」
「もう他の所に行った可能性もあります。でなければ、こんなに父さまがのんびり準備などしているはずがありません」

父さまの苦々しい顔。

「でしたら後学の為に、騎士の普段の活動を見学させていただいてもよろしいではないでしょうか」
「そ、そうかもしれないね」
「はい」

にっこり笑顔。伊達に毎朝、鏡の前で研究をやっているわけではない。

「い、いいんではないですかね、連れて行くぐらい」
「というわけなので、連れて行ってください父さま」
「いや、しかし」
搦め手も駄目か。
使いたくは無かったが、ここはもうこれしかないか。

「・・・ええと、後で湖に散歩に行きたくなったりしたら困りますから」
「・・・・！　今回だけだぞ」
「父さま、ごめんなさい。でもありがとう」
「・・・湖では、わたしの指示には絶対に従うこと。それが条件だ」
「わかりました」

湖に向かうにあたって、俺は父さまの後ろに乗る事になった。
乗馬経験などない俺にしてみると、とにかく高くて怖いの感想しかない。
顔に出すと置いていかれるので平静を装う。
同行する騎士は2人。
カインさんと、初めて見るそれなりに経験を積んでいそうなタロスという騎士だ。

「報告があったのは昨日だ。すでに移動している可能性が高い」
3人とも胸には、赤の地に金色の『8本足の蜥蜴』の紋章が描かれている。
目が印象的に描かれた変な蜥蜴だが、いわゆる伝説の魔獣との事。
この紋章が父さまが隊長である騎士団のマークだ。
「だが、もしもという事はある。十分に注意するように」
アルミナ湖は馬の足で2時間というところにあった。
東西1km、南北0．5kmほどの楕円形の湖で、森に囲まれた中にある。

魔物を見たとの報告は、この湖を利用している漁師のからのもので。
見かけただけでまだ誰かが襲われた、という事では無いらしい。
「馬はここに残し、わたしとカインで湖の周りを見回る。アフィニアはここでタロスと待機だ」
２人はすぐさま準備にかかる。
馬は木立に括(くく)り付けておくようだ。
「タロス。もし魔物が襲ってくる様な事あれば、馬をエサにして逃げろ」
「は、わかりました」
「アフィニアの事、頼むぞ」
「命に代えても」
父(とう)さまとカインさんは歩いていってしまう。
「待機か」
「何か言われましたか？」
「いえ何も、おほほ」
父(とう)さまの指示に従うのが条件だしな。
今回は魔物見れないか。
仕方ない。
手の中にある、母(かあ)さまから貰った３０ｃｍ程の杖を眺め。
俺はこの暇になった時間を、魔法の練習に当てると決めた。

◇　◇　◇　◇　◇

「そういえばタロスさん。ここに出た魔物ってどんなのですか？」

父(とう)さま達が出発してから、もうすぐ2時間ほ経つだろうか。

俺は時計が無いのでまったく分からないが、タロスさんには日の在る位置でだいたい分かるそうだ。

お腹も減ってきたし、もう昼時なのだろう。

「ダークハウンドだそうです」

その知識なら、ある。

大型犬サイズの青黒い犬で、目は血の色をしている。1匹では大したことない魔物だが、複数となるとそれなりに厄介な魔物だ。

それでも、並の冒険者や騎士にとってみれば初級クラスの魔物(モンスター)である事は否めない。

わりとあっさりと、連れて来てくれたと思ってたけど。

初級の魔物なら、という判断もあったという事か。

杖によって、空中に次々と呪紋が描かれる。

「明かり(ライト)」

「感覚強化(フィーリング)」

「魔法の矢(マジックアロー)」

このタロスという騎士は、あまり話しをするタイプではないようだ。

話しかければ答えはあるが、それだけだ。
職務に忠実という事なのか。
そうして、もう一度話しかけようとしてそれに気付いた。

「タロスさん！　危ない！」

それに気付けたのは、感覚強化（フィーリング）の魔法のお陰だった。
だが、だからといってあまり状況に変化はなかった。
タロスさんは突然現れた巨大な影に一撃され、俺のほうに転がってくる。

「魔獣サラディオル・・・！」

タロスさんの驚愕に満ちた声。
その名前は・・・知識にはない。
だが、その威圧感だけで並の魔物（モンスター）とは一線を画す存在である事は明白だった。

前の世界でのゲーム知識で当て嵌めるなら、コカトリスのアレンジといったところか。
頭に鶏冠（とさか）こそ無いものの、鳥のような体、トカゲの足と尾。
鳥の部分はアヒルのように見えるが、こんな２ｍを超す大きな生き物をユーモラスだなんて思えない。
それが２頭だ。いや、２羽っていうのか？

「タロスさん、大丈夫ですか！」
「とっさに身を躱（かわ）したつもりだっだが、躱（かわ）しきれなかったようだ」
「・・・今、回復呪文を」
「君は逃げなさい。お父様もそう言っていただろう」

タロスさんの言葉を無視して回復(キュア)呪文をかける。

「残念ですが、僕ではこれぐらいしか治せません」

「ありがたいが、もう逃げなさい」

「父さまは、馬をエサにしろとは言いましたが、あなたをエサにして逃げろとは言ってませんでした」

「しかし」

「・・・来ます」

2羽の内、小さめの方が襲い掛かってくる。

タロスさんは、何とか体を起こし迎え撃つ。

「援護します！」

初級しか使えないとはいえ、俺だって魔法使いだ。

やってやるさ！

呪紋を描く。

「魔法の盾(マジックシールド)」

短い時間だが、半透明の魔法の盾が、敵の攻撃を受け止めてくれる呪文だ。

だが。

もう1羽が襲い掛かって来たら、それで終わりだ。

タロスさんはよく戦っているが、ダメージも完全には回復していない。

・・・？

・・・何で襲い掛かってこない？

・・・。

・・・・・・！

そうか！　こいつら親子で・・・これはアレか！

「タロスさん！　この2羽はおそらく親子です！」

「それが！　何、だ！」

サラディオルと言う名の魔獣は、幅の広い黄色い嘴で攻撃してくる。

タロスさんは何とか剣で防いでいるが、足や尾などもたまに使ってくるので油断できないようだ。

「おそらく、練習させてるんですよ！　子供に狩りを！」

「・・・そういう事か！　なら、あの大きい方は子供が不利にでもならない限り襲ってこないか！？」

「確証は無いですけど」

呪紋を描き、初級の回復呪文を唱える。

「回復（キュア）呪文」

「だとすれば！　わたし達がやるべき事は隊長が戻って来るまでの時間稼ぎか！」

「はい！　もうすぐ父（とう）さまは戻ってこられます！」

たぶん。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3648z/

アフィニア日誌

2011年12月20日01時50分発行